

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。Delusion story

神納 一哉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。の短編集です。

基本的に一話完結、思いついたら書いていくスタンスでいきたいと思えます。

カップリングの小話が中心になる予定です。

思いついた設定でプロローグ的な何かを書くこともあります。

特定のキャラを貶すことがあるので、アンチ・ヘイトタグを付けておきます。

アンチ・ヘイトの場合は話の前文にその旨を記載してありますので、原作至上主義の人やキャラ崩壊が嫌な人、アンチ・ヘイト嫌いな人はブラウザバック推奨です。

妄想話やキャラ崩壊が嫌な人はブラウザバック推奨です。

## 目次

修学旅行Delusion	もしも比企谷八幡と雪ノ下雪乃が信頼	
関係を築いていたら	(八雪)	1
修学旅行Delusion	もしも比企谷八幡と雪ノ下雪乃が信頼	
関係を築いていたら	Ver. 2 (八雪)	6
修学旅行の後、部室に向かった比企谷八幡が奉仕部の二人の会話に聞	き耳を立てていたら？	12
もしも三浦優美子が幼馴染だったら	(八優)	17
もしも比企谷八幡が事故の後遺症を持っていたら		23
もしも比企谷八幡がパンさんと猫が大好きな女子力高め男子だった	ら	31
もしも比企谷八幡がパンさんと猫が大好きな女子力高め男子だった	ら Ver. 2	36
彼が彼女で、彼女が彼で	(八雪)	42
もしも俺ガイルの世界にコロナウイルスが蔓延したらあるかもしれない会話	(八雪)	51

# 修学旅行 De lusion もしも比企谷八幡と雪ノ下雪乃が信頼関係を築いていたら（八雪）

「……先に戻るわ」

冷たい声音でそう言うと、雪ノ下は一瞬だけ俺を睨んでから背を向けて歩いて行つた。その後ろ姿はいつもと変わらず、凜とした雪ノ下雪乃だった。

残されてしまった由比ヶ浜は力なく笑う。

「あ、あたしたちも、戻ろっか」

無理して明るく振舞うときの声だ。わかりやすく助かる。

ここで由比ヶ浜に同意して戻ることを選択するのが無難なのだろうが、今の俺にそれを選ぶことは出来なかった。

「いや、先に戻ってくれ。俺はもう少し頭を冷やしてから戻る」

「頭を冷やすってことはさ、悪かったって思ってるんだよね？なんで、あんなことしたの？」

「あれが一番効率が良かった。それだけだ」

「効率とか、そう言うのじゃなくて……」

由比ヶ浜は両手をぎゅゅと握りしめると、真つすぐに俺を見て言う。

「ああいうの、やだ」

「解決を望まない奴もいて、現状維持がいいって奴もいた。みんなに都合よくは出来ないだろ。だから妥協できるポイントを探すしかない。時間もなかったしな」

「みんなも変わらないで明日から過ごせるかもしれないけど、人の気持ち、もつと考えてよ。なんでいろんなことがわかるのに、それがわかんないの？」

そう吐きだすと、由比ヶ浜は俺に背を向けて走り去って行く。

青白い光を放つ竹林のトンネルは凍えそうなほどに冴え冴えとしている。

空を見上げると、月が雲に隠れて見えなくなっていた。

風が竹林を揺らして涼やかな音を奏でる。

そこに小さな足音が混ざったのは、由比ヶ浜が居なくなってから暫くしてからのことだった。

「彼女は、気付かなかったのね」

「まあ、な。『人の気持ち、もつと考えてよ』だとか」

「私はあなたのやり方がとても嫌いとしか言っていないのにね。あなたを否定したわけじゃないのに、彼女には私があなたを否定したように見えたのかしら。まあアイコンタクトなんてあなたとしかしたことなくあったから仕方がないかもしれないけれど」

小さく、本当に小さく微笑みながら、雪ノ下は真つ直ぐに俺を見た。

「それで、なぜあんなことをしたのか、説明して貰えるのよね？うそがや嘘谷くん」

「なんだその嫌な名前は」

「まさか、まじがや本気谷くんだったの？」

「いやいやいや、それは無いから。簡単に言うと、今回の依頼は3つあったわけだ」

「戸部くんの他に葉山くんから依頼があったとは思っていたけれど、もう一つの依頼があったのね」

「葉山の依頼に気付いていたのか」

「ええ。あの男は昔から変わらないもの。おそらくグループの人間関係がおかしくならないように戸部くんの告白を止めてくれとでも依頼してきたのでしょうか？自分で戸部くんの依頼を奉仕部に持ってきたくせに」

こめかみ蟀谷を押さえて雪ノ下が溜息をつく。葉山への苛立ちを隠そうとせず、あの男呼ばわりである。

「何故葉山がそうしたのか見当が付けば、自ずと3つ目の依頼もわかると思うのだが」

「そうね。戸部くんの告白の阻止を頼まれたとかかしら？」

「まあ正解。戸部には告白のサポート、海老名さんには告白の阻止を頼まれた葉山は、奉仕部と言うか俺に事態の打開を求めてきたってことだな」

「自分のグループの問題を比企谷くんに押し付けて、漁夫の利を得ようとしたってことね。まさかまだ私に懸想しているのかしら。怖気<sup>おそげ</sup>がするわ」

「どういうことだ？」

「比企谷くんを悪者にして、私に取り入ろうとしたのじゃないかと思うのだけれど」

「下種<sup>げす</sup>だな」

「…ええ。本当に」

ぽしよりと呟くと、雪ノ下はそつと俺の右手に自分の左手を合わせて、きゅつと握った。

「少しだけ、こうしていてもいいかしら？」

「別に構わんが」

「ありがとう」

そう言つて微笑んだ雪ノ下はとても儂く見えて、思わず引き寄せて抱き締めてしまいそうになったが、代わりに左手を固く握りしめることによつてその衝動を抑え込んだ。

「比企谷くん」

「なんだ？」

「もう、あんなことはしないで。私、虚言は嫌いな」

「善処する」

「だから、早急にさっきの虚言を消してしまう必要があると思うのだけれど」

「……………はっ…」

「それで、今、この状態というのは、ロケーションとしては最適だと思うのだけれど」

雪ノ下を見ると、その顔は真っ赤に染まっており、視線は伏し目がちではあるが俺に向けられている。

雪ノ下の言う『虚言を消してしまう必要がある』とか、『最適なロケーション』っていうのは、つまり、そういうことなのか？

「……………雰囲気はとても素敵ってやつか？」

「ええ。そうね」

雪ノ下に最終確認をすると、俺は右手に力を込めた。

「ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください」

「はい。よろしくお願いします」

それから俺達は真っ直ぐにただお互いを見つめ合い、やがてどちらからともなく瞳を閉じて、お互いの距離が零になった。

× × ×

「ちよっ!?ゆきのん、どういうこと!」

昼休みの教室内に由比ヶ浜の声が響き渡った。

「どういうことも何も、見た通りなのだけれど」

小さく首を傾げながら雪ノ下が由比ヶ浜に返事をする。その仕草はとても可愛らしい。

「だから、なんでゆきのんがヒツキーを呼びに来て、二人揃って教室を出ていこうとするの?」

「比企谷くんと一緒に部室で昼食を食べるためよ。由比ヶ浜さんは今日は三浦さんたちとお昼を共にするのでしょう?」

「それはそうだけど、ゆきのん、今までヒツキーと昼食を食べるなんてことなかったじゃん!」

「そうね。だから今日は迎えに来たの。比企谷くんの様子を見るためでもあったけれど、この様子だと心配しなくても良かったみたいね」

教室内を見回してから俺に微笑みかける雪ノ下。由比ヶ浜の後ろから葉山が苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべて俺を見ているが、そんなの知ったこっちゃない。海老名さんは俯いてるし、三浦は葉山を見て怪訝そうな顔をしている。

「何で?ヒツキーのこと嫌いになっただんじやないの?」

「あら?由比ヶ浜さんは比企谷くんのことが嫌いな?」

「嫌いとかそういうんじゃないよ?」

「由比ヶ浜さんはいつもと変わらない葉山くんのグループで仲良く過ごしてくれればいいわ。私は比企谷くんと二人で仲良く過ごさせてもらうから」

「それって、どういうこと...」

「葉山くんなら教えてくれると思うわ。行きましよう比企谷くん。早

くしないとお昼御飯が食べれなくなってしまうわ」

「おう。雪ノ下の弁当、楽しみだな」

「ふふ。期待してもらっていいわよ」

楽しそうに言いながら、俺は雪ノ下と連れ立って教室を出た。

「なあ、俺の様子を見に来たって言っていたけど、どういうことだ？」  
「文化祭の時のようにあなたの悪評が流れていたら葉山くんを抹殺しようと思っていたのだけれど、あなたの悪評は流れていなかったから悪いとは思っているようね。変な顔をしていたのは、私とあなたが親密になったからかしら？」

「修学旅行のことはあの時だけで済まそうとしたんだろう。ありがたいことだけど」

「もつともあなたの悪評が流れていたら、ただでは済まさなかったのだけれど」

「おいおい、お前に悪評が着けられるようなことは無いようにしてくれよ」

「大丈夫よ。私、強かだもの。その言葉、そのままあなたにお返しするわ。あなただけが泥を被るようなやり方は今後一切認めませんからね」

「……ありがとうな」

「どういたしまして」

特別棟の階段を並んで上りながら、俺たち以外の姿が無いことを確認して俺は隣に居る雪ノ下の手を握る。

幸い振り解かれるようなこともなく、それどころか握り返されたことに感動を覚えながら、俺達の始まりの場所へと進んでいくのであった。



修学旅行 De l u s i o n   もしも比企谷八幡と雪ノ下雪乃が信頼関係を築いていたら   Ver. 2 (八雪)

「二応、丸く収める方法はある。時間が無いから実質それしか方法が無いが」

「却つ下」

雪ノ下は文化祭の時と同じように花のような笑みを浮かべてそう言う。鋭い眼差しで俺を睨みつけた。

「あなた、また泥を被るつもりでしょうじしやうがや自傷谷くん。いい加減、そういうのは止めなさい。由比ヶ浜さん、よく覚えておきなさい。この男が解決策があると言って目を逸らしたときは、自らを犠牲にして何かをしようとしているときよ」

「自らを犠牲にするって、何をやる気なのヒツキー！」

「少し落ち着けお前ら」

由比ヶ浜を宥めてから二人に向き合い、一つ溜息をつく。

「はあ。雪ノ下には敵わねえな。まああれだ。奉仕部は戸部の告白のサポートの依頼を引き受けちゃったわけだが、それとは別に戸部の告白を阻止したい奴がいて、現状維持を望んでいる奴もいる。だから俺が戸部の前に海老名さんに嘘告白をして有耶無耶にしちまおうと思っていたんだが」

「有耶無耶にするなら確かにそれが最適かもしれないわ。だけど、その方法は認めません。あなたが泥を被るのは嫌だし、たとえ嘘だとしても海老名さんに失礼だと思わないの？失礼谷くんしつれいがや」

「そうだよ、姫菜に失礼だよヒツキー！」

「じゃあ聞くんが、他にどんな解決方法がある？」

俺がそう尋ねると、雪ノ下は小さく口元を綻ばせてから雪ノ下の考えた解決方法を告げた。それを聞いた俺と由比ヶ浜は反論したが、結局は雪ノ下の提示した解決方法を実行するということで落ち着いた。最後まで由比ヶ浜が渋っていたが、由比ヶ浜の所属するグループ内で

の問題なのだから、由比ヶ浜が当事者になるのは駄目だという結論となつたのである。

結論が出たところで、向こうから由比ヶ浜からの呼び出しを受けた海老名さんが歩いてくる姿が見えた。

葉山たちが道の角から戸部を送り出す。

竹林の道の脇に等間隔で置かれた灯籠を一つづつ追い越して、海老名さんはやってきた。

戸部がそれを緊張の面持ちで迎える。

「あの……」

「うん……」

戸部が声をかけると、海老名さんはそれに小さく答えた。

それを見た俺は、すぐさま雪ノ下の手を引いて待機場所から灯籠の前に飛び出し、雪ノ下と向かい合う形で道の真ん中に立ち、周りに聞こえるよう大声を張り上げた。

「ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください」

そう、雪ノ下の考えた解決方法とは、俺が海老名さんではなく、雪ノ下に告白して戸部の告白を阻止するというものだった。

これで俺が雪ノ下に断られたら海老名さんに目配せをして誰とも付き合う気が無いことを口にしてもらおうという作戦である。

「はい。よろしくお願いします」

………あれ？

「すごいすごい、生告白&カップル成立の瞬間を見ちゃったよ。憧れちゃうな。まあ、私は皆と騒いでいる方が楽しいから、今のところは誰かとお付き合いする気はないけど」

「あー、海老名さんってそんな感じなん？まあ、俺もそんな感じかな。ヒキタニくんスゲーわ。まじリスペクトしねーと」

俺が雪ノ下に向けた視線を外せないまましていると、海老名さんが空気を讀んだのか誰とも付き合う気が無いことを口にした。それを聞いた戸部も不自然にならないよう追従している。そして気が付くと戸部にリスペクトされている始末。

「みんな、ひとまず退散しよう」

「ああ」

「だな」

「あ、あはは。そうだね隼人くん」

俺と雪ノ下が動けずにいると、やがて葉山が大和と大岡、由比ヶ浜を連れてその場を後にして、竹林の道には俺と雪ノ下の二人だけとなった。

「これで依頼達成ね」

「ああ」

「二人きりになったのだけれど」

「そうだな」

「比企谷くん」

「なんだ」

「好きよ」

「……………いいのか？俺で」

「あなたじやなきや駄目なの」

「雪ノ下。俺も、お前が好きだ」

「比企谷くん」

それから俺たちは真っ直ぐにただお互いを見つめ合い、どちらからともなく瞳を閉じて、やがてお互いの距離が零になった。

× × ×

「由比ヶ浜さん、抜け駆けしてごめんなさい」

ホテルのロビーにゆきのんに呼び出され、顔を合わせた途端に深々と頭を下げられた。

ヒツキーがゆきのんに嘘告白をして、それをゆきのんが断るとともに、とべつちの告白を有耶無耶にしてしまう作戦だったのに、ゆきのんはヒツキーの告白を受け入れてヒツキーと恋人同士になった。

正直、ゆきのんが告白を受け入れたのを見たときは裏切られた気がした。だけど、考えてみると文化祭の時からヒツキーとゆきのんはお互いを意識しているように見えたし、信頼しあっているようにも見えただから、収まるべきところに収まったと見るのが正しいような気がする。

「えつと、ゆきのん。ヒツキーと相思相愛だったんでしょ？ 抜け駆けとかそういうの関係くない？」

「でも、あなたも比企谷くんのこと……」

「あはは。あたしは憧れの方が強かったと言いますか何と言いますか、確かにヒツキーのことは好きだったけど、ゆきのんとヒツキーを見ているとき、お似合いだなあつて気持ちの方が先に来ちゃうんだよね。恋愛関係であたしの入る余地はないなって。でも、友達付き合いならこれからも変わらずに出来るよね」

「ええ。もちろん。由比ヶ浜さんは私にとってかけがえのない友人だもの」

「うん。じゃあ、そういうことで。これからもよろしくね、ゆきのん」

「ありがとう。由比ヶ浜さん」

「それで、ヒツキーとはどこまでいったの？ ゆきのん」

「な、何を言っているのかしら由比ヶ浜さん。確かに比企谷くんとお付き合いを始めることにはなったのだけれど、いきなりそんな破廉恥なことをするわけじゃないでしょう。そもそもそういう話を友人同士でするのは問題があると思うのだけれど」

「焦っちゃうゆきのん可愛い」

「抱き着かないで由比ヶ浜さん」

「よいではないか、よいではないか」

おどけてそんなことを言いながらゆきのんに抱き着いた。泣きそうになったのを誤魔化したのは内緒。

—— バイバイ、あたしの初恋。

× × ×

ホテルの廊下で比企谷と会ったので、少し話をすることにした。

「比企谷、ありがとう。おかげで今まで通り過ごせそうだ」

「それは何より。それじゃあ依頼は達成ってことでいいか」

「そうだな。戸部には時期尚早だったということに納得してもらった。その、君たちのことが大々的に広まっているけど、大丈夫か？」

「まあ、雪ノ下も隠す気はないって言っていたから問題ない。個人的にはあまり目立ちたくないけれど、甘んじて受け入れる」

言葉の端から俺の幼馴染への信頼を感じることが出来る。良かったな、雪乃ちゃん。

「そうか」

「ああ」

「とりあえず、おめでどうと言っておいた方がいいかな？」

「……まあ、うん。ありがとう」

「……君も普通に礼を言えるんだな。驚いた」

「ほっとけ」

照れ隠しなのか比企谷は俺から視線を外して歩き出す。そしてすれ違いざまに俺に向けて小さくぼそりと呟いた。

「まあ、お前の幼馴染は俺が守るから」

そのまま離れていく比企谷の背中に、届かないよう小声で返事を返しておく。

「よろしく頼む」

× × ×

「ほらヒッキー、さつさと部屋に行く！」

「わかったから押すなって。転んじやうだろ」

「早く早く、ゆきのん待ってるよ」

「だから押すなって。由比ヶ浜は三浦たちと食べるのか？」

「うん。ゆきのん今日はヒッキーと二人で食べたいって言ってたし。あーんとかしてもらっちゃうのかな？」

「……ノーコメント」

「それ、してもらってるって言ってるようなもんだし！」

「うつせえ。雪ノ下がやりたがるんだから仕方ねえだろ」

「やりたがるって、その言い方、ヒッキーキモい！」

「馬鹿、変な言い方するな。じゃあ行ってくるわ。また後でな」

「うん。いつてらっしやいヒッキー」

由比ヶ浜に送り出された俺は、特別棟の階段をえっちらおっちらと上っている。最近の昼食はベストプレイスで戸塚を眺めながら食べるより、奉仕部の部室で雪ノ下と隣り合わせに並んで食べる率が増えた。

雪ノ下の作る弁当は美味しい。それはもう間違いなく。

だから思わず早足になってしまふのは仕方のないことなのである。奉仕部の扉を開けると、机の上には俺のための弁当が用意されていて、雪ノ下が笑顔で俺を迎え入れてくれる。

「いらっしやい比企谷くん。さあ、お昼ご飯にしましょう」

「おう。いつもありがとうな」

「どういたしまして。ふふ。どれが食べたいかしら？」

「じゃあ、そのハンバーグから」

「はい、召し上がれ」

「モグ……。うん、美味しい。雪ノ下はどれから食べるんだ？」

「人参のグラッセからいただくようかしら」

「ほれ、あーん」

「あーん」

食べさせ合うのにも慣れたもので、俺たちはスムーズに食事を済ませていく。

そうして食事を済ませると、雪ノ下が俺の頬に手を置いて、小さく微笑む。

「比企谷くん。お口が汚れているわよ。綺麗にしてあげる」

そうやってキスをしてくるのが、最近の雪ノ下の食後の習慣となっている。

これは確かに、二人で食事をしないと出来ないことであろう。

そして雪ノ下の笑顔を見ながらこんな昼休みも悪くないと思うのであった。

修学旅行の後、部室に向かった比企谷八幡が奉仕部の二人の会話に聞き耳を立てていたら？

そして、長い時間をかけてようやく部室の前にたどり着く。

扉に手を掛ける前に、大きく深呼吸する。

と、中からは話し声が漏れてきた。扉越しの声は聞き取りづらいが、どうやら二人とも来ているらしい。

扉に手を掛けて、俺は逡巡した。戸部や海老名さんたちの葉山グループは、あの嘘告白をグループ内の揉め事として内々に処理することにしたようだが、雪ノ下と由比ヶ浜はどう思っているのだろうか。そんな疑問が俺の手を止めた。

「ねえゆきのん。ヒッキー遅いね」

「……そうね」

「でも、ヒッキー来るのかな」

「もしかしたら来ないかもしれないわね。もしそうだとしたら、平塚先生が来るでしょうね」

「どうして?」

「比企谷くんのことだから、部活を休むって平塚先生に連絡を入れると思うの」

「あー。そうかも」

そうか、平塚先生に断りを入れれば休んでもいいんだ。雪ノ下もそう考えているみたいだしそうしようかな。

「…今日のところは平塚先生が来てくれればいいわね」

「……………え?」

「ゆきのん……」

「比企谷くんと、どんな顔をして会えばいいのかわからないわ」

「ゆきのんも? 実はあたしもちよつと顔合わせ辛いかな、なんて思ってるし」

「……………なんだよそれ。」

「あたし、怒ってるし」

「…私もそうかもしれないわ」

「ゆきのんも？」

「ええ。彼のやり方は許せないわね」

その雪ノ下の言葉を聞いた瞬間、俺は扉に掛けていた手に力を込めて部室の扉を勢いよく開けた。雪ノ下と由比ヶ浜が驚いた表情を浮かべて俺の方を見る。

「…………お前らは何かしたのかよ？」

「比企谷くん？」

「ヒツキー？」

「雪ノ下。お前、俺が、一応、丸く収める方法があるって言ったら俺に任せるって言ったよな？」

「…………ええ」

「ならあの時、奉仕部への依頼は戸部のサポートだけじゃなくて、海老名さんの戸部の告白を阻止して欲しいって依頼があったことに気付いていたか？」

「…………そこまでは知らなかったわ。…そう、だから貴方はあんなことを」

「え？姫菜そんなこと依頼してたの？」

「葉山グループの由比ヶ浜なら海老名さんの気持ちに気付くと思ったけどそんなことはなかったな。それ以前に告白の手伝いなんて依頼は受けちゃいけなかったんだ。俺も雪ノ下も反対したのに由比ヶ浜が雪ノ下に泣きついて、結局依頼として受けちゃった。まあ依頼を受けちゃったことに関して止められなかった俺にも責任の一端はあるけど、戸部の告白の手伝いなんて誰もやってなかったよな？」

「…ロケーションとか意見出したし」

「あれって奉仕部内での雑談だったじゃねえか。ともかく戸部の告白の手伝いなんて何もやってないだろ」

「だからって、あれは酷いよ」

「…………いえ、由比ヶ浜さん。比企谷くんが言うように海老名さんの依頼があったとして、海老名さんの真意に気付いたのが、比企谷くんが丸く収める方法があると言ったときだったとすれば、あの方法しかな



かったかもしれないわ」

雪ノ下が悔しそうに唇を噛みながらそう言うと、俺を真正面から見つめてきた。

「比企谷くん。あの時、そうするって私たちに話してくれていたら、海老名さんを巻き込まずに私たちだけで解決できたのよ」

「いや無理だろ。時間なかったし」

「無理じゃないわ。戸部くんが海老名さんに告白する前に、比企谷くんが私か由比ヶ浜さんに告白すればよかったのよ。私たちも全員あの場所に居たのだから」

「……………は？」

「ゆ、ゆ、ゆきのん!?何言ってるの!?!」

「あの時、比企谷くんが何をしようとしていたのかを話してくれたら、戸部くんの告白を打ち消すように比企谷くんが私か由比ヶ浜さんに告白して、私たちが返事をすれば海老名さんも話を合わせてくれていたと思うのだけれど」

「いやいやいや、ちよつと待て雪ノ下。お前の言う返事とは、もちろんお断りの言葉だよな?」

「誠に不本意なのだけれど、比企谷くんが海老名さんに言ったことを私に言ってくれたのならば、謹んでお受けしたわよ?」

「ちよつとゆきのん!?!何言っちゃってるの!?!」

「……………お受けした?それってつまり、え?…そうなの?」

「貴方が海老名さんに告白したのを聞いて、私はとても胸が痛かったわ。あの時はそれだけかと思っただけけれど、今ならわかるわ。あれは海老名さんを妬んでいたのだった。海老名さんに嫉妬していたのだった」

真つ直ぐに俺を見て、雪ノ下が言葉が続ける。

「比企谷くん、私は比企谷くんのことが…」

「ゆきのんストーーーーップ!!」

「由比ヶ浜さん、邪魔をしないでくれるかしら?」

「ずるいよゆきのん!あたしだって、あたしだってヒツキーのことが…」

「由比ヶ浜さん、黙りなさい！」

「ここまで言っちゃつたらもう無理だし！」

「確かにそうね。それでは一緒に言いましょうか」

「ゆきのん、なんか達観してる!？」

「由比ヶ浜（さん）が、達観してる（だど）（ですって）!？」

「二人とも酷っ!?!しかも息ぴったり！」

いやだって、お前、お馬鹿キャラじゃん。ほら、雪ノ下も頷いてる。俺たち、自然とアイコンタクトできてしまうのって何気に凄くね？

「じゃあ今度はあたしとゆきのんが息を合わせる番だね！いくよゆきのん！」

「不本意なのだけれど、仕方ないわね」

雪ノ下はそう呟くと、大きく息を吸い込んでから由比ヶ浜を見て頷いた。

「比企谷くん（ヒツキー）、好きです（好きっ!）」

「……見事にバラバラだな。まあ、今はそれは置いとくとしても、お前から、さつき俺のことを拒絶しておいて何言ってるの?」

「言っただでしょう?海老名さんを妬んでいたのだから。告白は私にして欲しかったのよ。それにあれは拒絶じゃないわ。あなたのやり方が許せないって言ったのよ。私に嫉妬させるなんて、なんて罪深い人なのかしら。これは責任を取って私と正式なお付き合いをしてもらうしかないわね」

「ちよつとゆきのん、どさくさに紛れて自分に都合のいいことばかり言わないでよ。でもねヒツキー。あたしも姫菜に嫉妬したから、ヒツキーと顔を会わせ辛かっただけなの!だから拒絶したわけじゃないし」

「ごめんなさい。謝って済むことだとは思わないけれど、あなたが聞いていないと思ってあなたを傷付けるようなことを言ってしまった。でもあなたのことが好きなのは本当よ。比企谷くん。好き。大好き。愛してるわ」

「ごめんねヒツキー。あたし馬鹿だから感情が先にきちやうんだ。ヒツキーのことが好きなのは本当だし、あたしと付き合ってください」

い」

部活メイトに拒絶された（と思った）のでブチ切れたら、部活メイトの二人から告白されました。

……いったいこれってどうすればいいの？

もしも三浦優美子が幼馴染だったら（八優）

「ごめんなさいっ！」

放課後、幼馴染に連れられて訪れた校舎裏で、俺は見ず知らずの女の子に開口一番で謝られた。

「なんでいきなりお断りされているわけ？なあユミ。これって新手のイジメ？」

「何バカなこと言ってるの。結衣もいきなり謝らないの。ハチが馬鹿なこと考えるっしょ」

どうやら頭を下げている女の子は、俺の幼馴染の三浦優美子の知り合いらしい。ゆるふわ茶髪で童顔巨乳、こいつ、ビッチか、ビッチなのか？

「えーっと、怪我させちゃってごめんなさい」

「いや、意味わからん」

「嘘っ!?!」

「結衣、ハチの言う通りそれじゃあわからないし。あーしが説明する。ハチ、入学式の日に車に轢かれたじゃん。そんなときアンタが助けた犬の飼い主がこの子。由比ヶ浜結衣つつって、あーしの中学からの友達」

「なるほど納得」

「理解早っ!?!」

いちいちオーバリアクションだなあと思いつつ、目の前の女の子を見て既視感を覚える。あれは確か中学のとき、部活行くときにユミを呼びに行ったときに見たような……。ああ、ユミの傍で縮こまっていた地味巨乳の子か。

「あー。確かユミの中学のクラスメイト。髪色と髪型を変えて化粧するだけで随分垢抜けた感じになるんだな。中学んときは話したことないけど、俺はユミ、あー、その三浦の幼馴染の比企谷だ。まあ、よろしく」

「あ、あたしは由比ヶ浜結衣です。優美子とは中学の時から友達やらせてもらってます。その、サブレを助けてくれてありがとうございま

した。あと、怪我させちゃってごめんなさい！」

「別に謝られる筋合いはない。あれは俺が勝手にやったことだ。むしろ車にぶつかってしまった俺の方が悪い。その、犬に怪我はなかったか？」

「おかげさまで、サブレは元気だよ」

「そりやよかった。んじゃ、これで」

「ハチ待つし。今日は一緒に帰るよ」

「いや、俺、これだからさ、ゆっくり帰りたいんだけど」

俺が松葉杖を片方持ち上げてそう言うと、ユミは頬を膨らませて俺を睨みつける。

「あーしが怪我人に無理させると思ってたの？つーか、今朝も一人で学校に来ちゃうし。ったく、怪我人なんだから幼馴染を頼れっての」「あ、あたしも荷物持ちくらいするし。比企谷くんが勝手にやったって言うなら、あたしも勝手にやるもん」

意固地になったユミは言うことを聞かないから、素直にその好意を受け入れることにする。由比ヶ浜さんもなぜかやる気のようなだが、まあ、いいか。

「お、おう。じゃあ遠慮なく。ありがとな二人とも」

「ハチ、それ反則。：結衣、ハチはあーしのものだからね。そこんこよろしく」

「あ、あはは。幼馴染には敵わないかなーって」

「何が反則なんだよ。それとも扱いの止めろ」

「さっきの笑顔、あーしと家族以外に向けるの禁止。絶対だかんね。ハチはあーしのものなのは変わらないんだからいいっしょ？」

家族以外に見せるの禁止って、なんだそれ、そんなにキモいのか俺の笑顔。そして俺はユミの所有物決定なんですね。とほほ。

「あー。なんかごめん、由比ヶ浜さん」

「あー、まー、そのー、ギリギリアウトくらいな感じ？たはは、何言ってるかよくわかんないね」

俺と目を合わさないようにして、由比ヶ浜さんがユミの方をチラチラと見ながらそう言ってくる。怯えて逃げ出したりしないだけま

しなのかもしれない。まあユミの存在が大きいのだろうけど。

「結衣ん家<sup>ち</sup>つて駅の向こう側だよな？じゃあ駅まで一緒つてことで」

「うん。それまであたしが比企谷くんの荷物持つていくね」

「じゃあ、よろしく頼む」

ユミから俺の鞆を受け取って、ユミと並んで歩き始める由比ヶ浜さん。俺はそんな二人の後ろを松葉杖を突いてゆっくりと着いて行く。

「ハチ、クラスで友達できた？」

「いや、特には。グループみたいのは出来上がってたし。いいんだよ俺は、一人静かに過ごせればそれで」

「ふーん。部活とかは入る予定ある？」

「ユミはテニス部に入るのか？」

「んー。高校のテニスってガチだから遠慮する。限界も見えていたし。部活とか入らないで何人かとつるんで遊び倒すとか良くない？」

楽しそうにそんなことを言ってから、ニヤリと口元を歪める。悪い予感しかしない。

「もち、ハチは荷物持ちだかんね」

「……俺が部活に入るって言ってもか」

「さつきも言ったけど、高校の部活って結構ガチなんよ。文系のやつは怪しいのぼつかだし、それでもハチは部活に入る？」

「毎日は無理だぞ。小町が心配だ」

「大丈夫。小町からはハチを連れ回っていいっていう許可貰ってるし」

「既に妹から売られていただど!?!」

まさか小町までユミ側に回っていたとは。これで俺は中学に続いて高校でもユミに連れ回されることが確定したのであった。

まあ、ユミに連れ回されるのは嫌じゃないんだけどな。

ユミのおかげで人付き合いの苦手な俺でもそこそこうまくやっていったし、ハブられたりすることはなかったからな。女子率高めで、パシラされたりはしたけれども。

駅前で由比ヶ浜さんと別れ、ユミに鞆を持ってもらって改札を通る。そのままタイミングよくホームに来ていた電車に乗り込み、ユミ

に優先席に座らされると膝の上に二人分の鞆を載せられた。

「足、痛くない?」

「ああ、大丈夫」

「なんなら、明日、あーしが自転車に乗せていこうか?」

「チャリに二人乗りじゃ、松葉杖運べないだろ」

「じゃ、足治ったら、あーしをハチの後ろに乗せて」

「治ったらな」

「ふふ。約束」

微笑みを浮かべて、目の前に小指を出してくるユミ。俺がその小指に自分の小指を絡めると、ユミはそれを小さく上下に振る。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のくます。指切った」

「相変わらず指切り好きだな」

「まあね」

昔からユミは指切りをやりたがった。俺もユミとの指切りは嫌いではなかったのでよく指切りをしては、ユミにいいようにこき使われていた。

ユミに弁当を作ってもらったりとか、膝枕で耳かきしてもらったりとか、プールに遊びに行ったりとか、良いこともあったからね。うん。

他愛のない会話をして家の最寄り駅で電車から降りる。改札を通り住宅街への道をユミの後ろに着いて歩いて行くと、近所の公園の前でユミが足を止めた。

「ちよつとき、寄っていかない?」

「まあ、別に構わんが」

「じゃ、こつち」

そう言って滑り台の前まで歩いて行くと、ユミは俺を滑り台の降り口に座らせる。

「あーし、怒ってんだからね」

「いきなりなんだよ」

「学校に一人で行ったこと」

「いいだろ別に」

「良くない。小町からも頼まれてるし」

「また妹に売られていた」

兄よりも隣のお姉さんの方を大切にすぎじゃないですかね？妹よ。

「で？なんでこんなところに寄り道してんの？」

「……………約束、覚えてる？」

俺は滑り台の降り口に座っているから、目の前に立っているユミが俺を見下ろすような形になっている。

ユミは髪を弄りながら俺を見ているのだが、少し考えてみても何のことを言っているのかわからなかった。

「ユミ、その、約束って？」

「昔、ここで指切りした。正確に言うとなり台の下でだけど」

小さくそう言いながらユミは俺の両肩に手を置いて、目線を俺の高さに合わせるようにしゃがみ込んだ。

目の前に、ユミの顔が近づいてくる。

「はちまー」

顔を覗き込みながら、ユミは幼い頃の呼び方で俺を呼んだ。

「……………ユミちゃん」

俺もユミのことを幼い頃の呼び方で呼び返す。

——はちまー。おおきくなったらあーしをおよめさんにしてくれる？

——うん。ユミちゃんをおよめさんにする。

——ゆびきりげんまん。うそついたら、はりせんぼんのーます。ゆびきった。

そうだ。確かにこの滑り台の下で、ユミをお嫁さんにするって約束をした。

「……………まだ結婚できる歳じゃねえんだけど」

「うん。知ってる」

「予約していいか？……………三浦優美子さん。俺と付き合ってください」

「はい。よろしくお願いします。好きだよ。ハチ」

「俺も好きだ。ユミ」



「……ん」

お互いの気持ちを確認した後、ユミに唇を奪われた。そういえばあの時もそうだったなあと、俺は幼い頃に滑り台の下で指切りをした後のことを思い出していた。

俺たちのファーストキスは幼稚園児のときでした。

もしも比企谷八幡が事故の後遺症を持っていたら

高校生活を振り返って 二年F組 比企谷 八幡

俺の高校生活は入院生活から始まった。

入学式の日、道路に飛び出した犬を助けようとして車の前に飛び出してしまったのだ。

結果、俺は車に轢かれ、入院四週間、全治二カ月という大怪我を負った。

飛び出した俺が悪いのにもかかわらず、俺を轢いた車の持ち主は治療代と入院費、通院費を出してくれて、お見舞いにも来てくれた。感謝しかない。

入学式から約一月後、五月中旬より、松葉杖を突きながらではあるが高校生活を始めた。

クラスメイトも必要以上に関わってこない。ぼっちには最適な生活を送ることが出来たと思っている。

問題があるとすれば、怪我が完治しても松葉杖が手放せなくなったことだろうか。左足麻痺という後遺症が残ってしまったのだ。

まあ自業自得だろう。体育の授業は免除されるので、ある意味ラッキーである。障害者手帳ももらえたし。

あまり運動をしない分、勉強をすることが多くなったので、学力も向上したと自負している。これからは理数系をもう少し頑張りたい。

二年になりクラスが変わったが、誰の邪魔にもならないよう、これからも快適なぼっち生活を送りたいと思います。

勉強も頑張ります。

× × ×

放課後の職員室に呼び出された俺は、椅子に座っている白衣の女性教諭の前で立たされていた。

担当教科は現国だったと思うんだが、なぜ白衣を着ているのだろうか？

「比企谷、この作文は何だ」

「確か、高校生活を振り返ってという題名の作文だったと思いますか」

「うむ。間違っではない。間違っではないのだが…。なあ比企谷、君には友人はいないのか？」

「極力人と関わらないようにしていますけど、ひとりだけ相手をしてくれる物好きな友人がいます。恋人はいません。それでも学校では階段を上るときとかは元クラスメイトやクラスメイトが手を貸してくれるので感謝しています」

「随分と達観しているのだな」

「こんな身体でしょう。下手に他人と関わって裏切られたらそれこそ命に関わりますからね。自衛手段ですよ」

「いや、そんなことは無いと思うが」

「…中学の時に他人の悪意ってやつに敏感になりましたね。五体満足だったその時でさえ命の危険を感じたのだから、こんな身体で多人数に囲まれたらそれこそ死活問題ですよ」

「…………君は、部活とか入っているのか？」

「入っていませんね。帰宅にも時間がかかりますし」

「ふむ。それならば一緒に来たまえ」

「へ？いや、あの…」

颯爽と立ち上がって職員室の扉を開けて廊下へと出ていく白衣の女性教諭の後姿を見て、俺は大きなため息を一つ漏らしてからゆつくりと職員室を出て、扉を閉める。それから特別棟の方へと歩いて行った女性教諭の後を追って、カツカツとリリウムの床を杖で突きながら進んで、階段の前で立ち止まった。

松葉杖を二本まとめて左手で持ち、右手は階段の手すりにかけて一段ずつゆつくりと階段を上っていく。一人で階段を上るのにもだいぶ慣れたつもりだが、それでも再び白衣の女性教諭の姿を目にしたのは、階段を上り始めてから三分ほどの時間が経過してからだった。

「遅かったな」

「…………これでも結構早くなった方なんですがね」

「軟弱者め」

「…………それで、目的地はその教室ですか？」

「ああ、そうだ。雪ノ下、入るぞ」

プレートに何も書かれていない何の変哲もない空き教室の扉を、白衣の女性教諭は無造作に開いて中に入る。

「平塚先生。入るときにはノックを、とお願ひしていたはずですが」「ノックしても君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ」

白衣の女教諭―平塚先生―の言葉に、彼女は不満そうな視線を送ってから、ちらりと俺を見て表情を固くした。

俺は、彼女を知っている。

二年J組、雪ノ下雪乃。

普通科よりも偏差値が二〜三ほど高い国際教養科において、一際異彩を放っている、学年成績一位の才色兼備な美少女。それが雪ノ下雪乃である。

「平塚先生。一つお聞きしますが、彼を連れてきたのは何故でしょうか?」

「ああ。彼は比企谷。入部希望者だ」

「おい、入部希望者ってなんだよ」

「君にはペナルティとしてここでの部活動を命じる。異論反論抗議質問口答えは認めない」

俺に抗弁の余地を許さず、平塚先生は怒涛の勢いで判決を申し渡す。

「平塚先生。私が聞いているのはそういうことではないのですが」「ふむ。どういうことかね?」

「彼は彼の意志でここまで来たのか、それとも、平塚先生に従ってここまで来たのかです。最も、平塚先生が命じている時点で、彼の意志でここに来たわけではないということがわかりました」

「まあ、こいつはやけにのんびりと階段を上ってきたが」

やれやれというように両手を広げて平塚先生がそう言うと、雪ノ下は冷ややかな表情を浮かべて平塚先生を見た。怖い怖い。

「……………左足麻痺の人を介助せずにここまで来させたのですか?」「そう大したことでもないだろう? たかが三階だ」

「では試しに体感してみてください。話はそれからです。よろしいで

すか。平塚先生」

「体感ってどういふことかね？雪ノ下」

そう尋ねる平塚先生を無視して、雪ノ下は俺の前へと近づいてくると、慣れた手つきで左手の松葉杖を取り、そのまま俺の左腕を担ぐようにして持ち上げて、その細身で俺の身体を支えて部室内へと歩き出す。

それから部屋の中央のテーブル側に置かれた椅子に俺を座らせた。

「比企谷くんは部室で待っていてちょうだい。あとで紅茶を淹れるわね。それと、松葉杖をお借りしてもいいかしら」

「ああ。悪いな」

「いえ。じゃあ、いい子にしていちょうだい」

「お前は俺の母ちゃんか」

「そうね。薫陶はいくらか受けているわ」

そんな言葉を残して、雪ノ下は部屋の隅に置かれていたロッカーを開け、中からブックバンドのようなものを数本取り出し、それを持って廊下へと出て行った。平塚先生が何かを言っているのが聞こえただが気にしないでおく。

雪ノ下は一年前の入学式の日には俺を轆いた車に乗っていたらしい。

事故当日には見舞いに来たり、入院中も週に二、三回の割合で授業のノートを持って見舞いに来てくれた。おかげで勉強が遅れることもなかった。むしろ普通科の俺に国際教養科の授業レベルは良すぎたまでもある。

お互いの趣味が読書ということもあり、雪ノ下とは馬が合った。退院する頃には連絡先の交換も済ませており、いつしか友達としてメールをやり取りをしたり、本を貸し借りしたりする程度には仲良くなっていた。

先程言った物好きな友人とは雪ノ下のことだ。そんなわけで俺は雪ノ下のことも奉仕部のことも良く知っている。

俺の障害が確定し、梅雨が明けた頃、雪ノ下が部活を始めたと連絡を入れてきた。曰く奉仕部。困っている人に救いの手を差し伸べるボランティア精神に基づいた部活動とのことだ。

奉仕という言葉の響きにエロスを感じちゃうのはしょうがないよね。健全な男子高校生だもの。

それはさておき、おそらく雪ノ下は平塚先生を階段下まで連れていき、左足を屈脚固定してから左手に松葉杖を持たせて階段を上らせるはずだ。パンツスーツだったから屈脚固定も問題ないだろう。

「雪ノ下の奴、体力無いのに無理したんだよなあ」

俺はそう呟くと、雪ノ下に特別棟の階段前に呼び出された時のことを思い出し、苦笑するのであった。

× × ×

「比企谷くんには一人で階段を上る訓練をしてもらおうと思います」

ある日の放課後、特別棟一階の階段前で、雪ノ下はジャージ姿でそう宣言した。

「いや、駅とか商業ビルにはエレベーターがあるし」

「移動教室は二階だったりするでしょう？それに二年になれば教室も上の階になるわよ。それまでには階段を上れるようにしておかないと」

「ふむ。言われてみれば確かにそうだな」

「幸いなことに、奉仕部の部屋は特別棟の三階にあるの。階段を上る訓練には最適だと思わない？」

「いきなり三階っていうのはきつくくない？まあ家の俺の部屋も二階にあるから、階段は上っているんだが」

俺が入院しているうちに、家の廊下や階段には手すりを付けてくれた。階段は両側に付けてくれたので、室内では松葉杖を使うことはなく、外出専用となっている。

「比企谷くんの家の階段は手すりが両側に付いているから、公共施設の階段とは違うでしょう？」

「……………なんで知っているんですかね？」

「施工したのは雪ノ下建設関係の工務店よ」

「なんか、悪いな」

「雪ノ下家は紹介しただけよ。工賃はちゃんと比企谷くんのお父様から適正価格をいただいたのだから、気にすることはないと思うのだけ

れど」

「ん。そうだよな」

親父に感謝しつつ、階段前まで進んでから松葉杖を二本纏めて左手に持ち、右手で階段の手すりを掴む。

「とりあえず、二階まででいいか？」

「ええ。私はあなたのすぐ後ろで待機しているから」

「それ危ないからね」

「信じてるわ。比企谷くん」

「……………善処します」

右足を上げてから体を捻って左足を持ち上げ、一段づつ上っていく。結構な重労働である。

そうやって十分ほどの時間をかけて二階へ到達すると、俺は踊り場の端で床に崩れ落ちた。

「……………きつつ。麻痺舐めてたわ。障害者手帳が出るだけのことはある」

「そうね。ここまで時間がかかるとは思っていなかったわ。そんなにきついものなのかしら？」

「正座した状態で左足を縛って固定してみるよ。そうすれば左足麻痺の感覚が疑似体験できるぜ。最も、体を捻って上に持ち上げる必要が無いから、厳密に言えば膝下欠損状態だけど、それでも少しは気持ちかわかるかもしれん」

「……………比企谷くん、ベルトを貸してもらってもいいかしら？あと、松葉杖も」

「別にいいけど、やってみる気か？」

「ええ。幸い運動しやすい恰好だし、障害というものがどういった感じかを知るにもいい機会ですもの」

そう言つて微笑むと、雪ノ下は俺からベルトと松葉杖を奪い、俺の側に正座をしてから折り畳んだ左足にベルトを巻き付けて締めあげ、固定した。

「……………立つのも一苦労だわ」

雪ノ下は何度かの試行錯誤の末、立ち膝状態から松葉杖を使って立

ち上がると、ゆっくりと階段の方へと歩を進めていく。

「ここで、左手で松葉杖を揃えて持って…、右手で階段の手すりを持つて…」

「気を付けろよ」

「ええ…」

床を這って階段下へと辿り着くと、俺は右手で手すりを持ち、勢いをつけて立ち上がった。

「念のため、俺も雪ノ下の後ろで待機するが、あまり期待しないでくれ。落ちそうになったら、まずは松葉杖を離せ。いいな」

「……………わかったわ」

そんな感じで、結果、雪ノ下が上れたのは二階と三階の中間の踊り場までだった。踊り場に膝をついて倒れてゼイゼイ言っている雪ノ下が色っぽく見えたのは内緒だ。

「ごめんなさい。片足の自由が利かないのって思っていた以上に厳しかったわ」

「まあ、わかってくればそれで十分だ。ありがとうな」

「別に、お礼を言われる筋合いはないのだけれど」

「俺が言いたかったただだから、気にしないでくれ」

× × ×

「比企谷、すまなかった」

部室に入ってきて来るとすぐ、平塚先生は俺の前で土下座をしてそう言った。

ちらりと雪ノ下に視線を送ると、彼女は掌の上にブックバンドのようなものを載せて揺らしながら小さく口角を上げる。

「私が体感した左膝下欠損よりも、比企谷の症状の方が重いんだよな。それなのに君はかなりの速さでここまで上ってきていた。私には到底できないことだ」

「まあ、雪ノ下が特訓を手伝ってくれましたから。慣れてるんですよ。この階段は」

「君が言っていた友達とは、雪ノ下のことだったのか」

「ええ、まあ。奉仕部の理念とも合致するとかで、階段の上り下りの特



訓をしてもらいました」

「雪ノ下も人が悪い。なぜ連絡してくれなかった」

「……………その、奉仕部としての仕事ではなく、友達の手伝いだっただけ」

話を振られた雪ノ下は、なぜか顔を赤くしながらぼしよりとそう呟いた。

それを見た平塚先生が、底意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「ほう。友達の手伝いねえ」

「はい。友達の手伝いです」

「部活動の時間にねえ」

「部室にはこの階段を使わないと行けませんから大丈夫だと判断しました」

「ふむ。まあそういうことにしておこう」

「ご配慮、感謝します」

雪ノ下がそう言って頭を下げると、平塚先生は俺に向き直った。

「比企谷、ペナルティとして部活動を命じるのは撤回させてもらおう。そのうえで、お願いがあるのだが聞いてもらえるか？」

「なんででしょうか？」

「奉仕部に入ってくれないか？友人と過ごす放課後は楽しいと思うのだが？どうだ？」

そんなもの、答えは決まっている。

ちらりと雪ノ下に視線を送ってから、俺は平塚先生に返事をする。

「わかりました。奉仕部に入部します」

これから、俺の高校生活は忙しくなりそうだ。

もしも比企谷八幡がパンさんと猫が大好きな女子力高め男子だったら

「雪ノ下、入るぞ」

「平塚先生。入るときにはノックを、とお願ひしていたはずですが」

「ノックしても君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ」

平塚先生の言葉に、彼女は不満げな視線を送る。

「それで、そのぬぼーつとした人は？」

ちろつと彼女の冷めた瞳が俺を捉えた。

「……………平塚先生。彼は依頼者ですか？」

俺の方をじーつと見つめながら美少女―雪ノ下雪乃―は平塚先生にそう尋ねた。

そんなに見られると、勘違いして告白して振られるまでもある。

「いや、彼は比企谷、入部希望者だ」

「承りました。部活動の説明もこちらで行った方がよろしいですか？」

「あ、まあ。そうしてくれると助かる」

「では比企谷くん、あちらから椅子を持って来てその机の前に座ってくれる？」

「お、おう」

何やら困惑している平塚先生をよそに、同じく困惑したまま俺は雪ノ下の言葉に従い、教室の隅に積み上げられた椅子を一つ取り出して、指定された場所の近くに下ろしてそれに座った。

「あー、それでは説明は頼んだぞ雪ノ下」

「はい。お任せください」

首を捻りながら平塚先生が教室を後にする。俺は平塚先生を見送った後で雪ノ下に視線を送ると、彼女は机を挟んで反対側の椅子に腰を下ろし、机の上で両手を組んで、その上に顎を載せた態勢で俺を見ていた。

「さて、まずは部活の説明をしてしましましょう。持つ者が持たざる者に慈悲の心をもってこれを与える。人はそれをボランティアと呼ぶ。その理念の下で活動を行うのが我が部の方針よ。ようこそ奉仕部へ。歓迎するわ。比企谷くん」

「気付いたら入部させられている!？」

「入部希望だったのでしよう?」

「いや、俺は課題の作文の件で呼び出されて、わけもわからなままここに連れてこられただけなんだが」

「そう。平塚先生はあなたの作文についてなんて言っていたの?」

「君はなぜ犯行声明を書き上げてるんだ? テロリストなのか? それともバカなのか? なんて言われたな」

「はあ。そういうこと。平塚先生はあなたの矯正を私に依頼しに来たのね。ああ、安心してちょうだい。私はあなたがテロリストやバカではないことはわかってるから。妥協案として、あなたはそのまま素直に奉仕部に入部しなさい」

こめかみを押さえて雪ノ下はそう言うと、にこりと小さく微笑んだ。

「ボランティア活動を行う部ってことでいいのか?」

「いいえ。自ら望んでボランティア活動は行わないわ。基本は依頼者が来るまでは読書をしたりして待機よ。依頼者が来たら、依頼内容を聞いてお手伝いできることなら手伝って、そうでないならお断りするわ」

「学校内のお悩み相談室みたいなの?」

「ふふ。そうね。そんな感じね」

「依頼って多いのか?」

「そう多くはないわ」

「…………俺が入る意味はあるか?」

そう尋ねると、雪ノ下は顔を上げて平塚先生が出て行った扉の方へ視線を向け、扉を見たまま口を開く。

「この奉仕部は、平塚先生が目を付けた問題児を隔離するためのサナトリウムみたいなものなのよ。他人を寄せ付けない孤高の氷の女王。」

それが私に付けられたレッテル。あなたは日頃から平塚先生に目を付けられているような孤独な人で、作文を理由にサナトリウムに放り込まれたと見るのが無難かしら?」

「まあ俺がぼっちなのは否定しない。他人に迷惑はかけていないつもりだが」

「平塚先生は一人で居ることを良しとせず、他人と関わりを持たせようとするの。諦めなさい」

「お前は諦めたのか?」

「諦めたというより、受け入れたといった方がいいかしら。平塚先生は私の家族とも仲がいいから、無視することも出来ないのよ」

「それはぐ愁傷様」

俺の言葉に雪ノ下は苦笑を漏らし、視線を俺に移して小さく一つ咳をする。

「比企谷くん。私と友達になってください。それから奉仕部に入室してください」

「……………どうせ選択肢はないんだろ? なら、よろしくな雪ノ下」

「ええ。よろしく。比企谷くん」

「でも、なんで俺と友達になつてくれるんだ?」

照れ隠しにそう尋ねると、雪ノ下は自分のブラウスの襟を摘んでにこりと微笑む。

「お互い孤独なパンさん仲間だもの。それ以上の理由は必要かしら?」

「……………良く気付いたな。そういうことなら文句はない。むしろ気分が上がってきた」

俺もYシャツの襟を摘んで、ぎこちなく雪ノ下に微笑んだ。

俺のYシャツの襟には白い糸でパンさんの顔を刺繍してあり、雪ノ下のブラウスの襟にも同様にパンさんの顔が刺繍してあった。

シャツの襟に同じ色の糸でパンさんの顔を刺繍するのは、ハンドクラフターの雪さんが運営する、パンさんファンクラブのブログ『孤独なパンさん』の会員の証(任意)なのだ。

「……………雪ノ下は、その、ハンクラはするのか?」

「私はこうやって襟に刺繍をする程度だけど、比企谷くんは？」

「俺は、こんなのか、作ったりする」

鞆を持ち上げ、側面に付けたストラップを見せる。

「猫さん！え？これ、比企谷くんが作ったの？」

「ああ。うちの飼い猫でカマクラっていうんだけど、そいつの子猫時代の姿だな」

それから鞆を開け、中からストラップを取り出して雪ノ下に渡す。

「良かったら貰ってくれ。その、友達記念ってことで」

「パンさん！しかもこれは市販されていない初期のパンさん。どこかで見たような気もするのだけれど」

「おお。さすがだな。自分でも上手くできたと思っている」

「……………はっ。比企谷くん。もしかしてあなた、ハンドクラフターのハチさん？」

「……………何で知ってるんだよ」

「あら。孤独なパンさん掲示板では有名よ。ええと、ということとは、比企谷くんがハチさんってことは、両手を広げたパンさん抱き枕とか、猫乗りパンさんの実物が比企谷くんの手元にあるのかしら？」

すげえキラキラした目で俺がブログに載せた作品を上げていく雪ノ下。何この子、めっちゃくちゃ可愛い。

「……………まあ、あるけど。作ったの俺だし」

「可及的速やかに比企谷くんのお家にお邪魔させてください!!」

「そこまで楽しみにされるとクラフター冥利に尽きるんだが。……………まあ、もし時間があるなら俺んち行くか？」

「行きましょう！椅子はそのままでもいいわ。どうせ明日も来るのだから。さあ、早く行きましょう」

「落ち着け。別に俺んちは逃げねえよ」

廊下に出て施錠すると、雪ノ下は一目散に職員室へ向けて歩き出した。

「俺、自転車だから校門で待ち合わせな」

「わかったわ」

雪ノ下と二人、並んで階段を下りながらそんな会話をしている。な

にこれ。なあにこれ。

「比企谷くん。また、後で」

「……………おう」

小さく手を振ってから歩いて行く雪ノ下を見送り昇降口へと向かう。

Yシャツの襟に指を這わせる。雪ノ下のブラウスの襟にも同じような刺繍が施されていたのを思い出し、自然と口元が緩む。

これからの高校生活は少し楽しくなりそうだな予感がした。

もしも比企谷八幡がパンさんと猫が大好きな女子力高め男子だったら Ver. 2

今日は雨が降っていて、ベストプレイスで昼食をとることができそうになかった。

かといって、教室で弁当を食べるのは気が引ける。というのも、昼休みの俺の席は、普段なら俺がベストプレイスで食事をしているのをいいことに、名も知らぬクラスメイトの女子が占拠しているのだ。今も俺のこと見ているし。

俺は弁当を持つと、いつもよりはやや遅れて教室から退散する。

自販機でスポルトップと共に野菜生活100いちごヨーグルトミックスを購入し、特別棟の階段を上って奉仕部の部室となっている教室の前に辿り着いた。

なんとなく居住まいを正してから教室の扉を四回ノックする。

「どうぞ」

「邪魔するぞ」

雪ノ下の返事を確認してから扉を開け、放課後にいつも使っている椅子を引いて腰を下ろす。

「いつもは外で食ってるんだけど、さすがにこの雨だと食えなくてさ。悪いけどここで飯食ってもいいか？あ、これ、場所代がわり」

野菜生活100いちごヨーグルトミックスを雪ノ下の前に置き、机の上に弁当箱とスポルトップを置いて、ちらりと雪ノ下を見る。

雪ノ下の前には緑色を基調としたナプキンが敷かれ、その上にいかにも女の子のお弁当といったお弁当箱の蓋がちよこんと置かれていた。

雪ノ下は左手にお弁当箱を持ち、右手は箸を持ったままで、俺の方を見ていた。

「あ、同じ机じゃ嫌か？だったらあっちの隅の方で食うけど」

「いえ、この机で食べていいわよ」

「悪いな。じゃあお言葉に甘えて」

「…………その、飲み物、ありがとう」

「どういたしまして」

いくらかのやり取りをした後で、自分の弁当を包んでいるナプキンを解きながら、気になっていたことを口にする。

「その七夕パンさんのナプキン。それって去年の限定のやつか？俺、買えなかったんだよな。後でちよつと見せてもらってもいい？」

「ええ、食事が終わってからでよければ」

「ありがとう。楽しみだ」

「比企谷くん。あなた、パンさんが好きなのかしら？」

「ああ。大好きだ。むしろパンさんが好きすぎて、裁縫を覚えたまでもある」

「そのナプキンの絵柄は、パンさんの夕涼みの一場面かしら？まさかそれはあなたが？」

「目敏いな。確かにこれは、パンさんの夕涼みの一場面をモチーフに刺繍したナプキンだ。それに気づくとは、雪ノ下、お前もかなりのパンさん仲間だな」

パンさん仲間を見つけて思わずテンションが上がってしまい、ブルグのコメントに返事をするような気やすさで雪ノ下に話しかけてしまった。

ちらりと雪ノ下を見ると、彼女は弁当箱の上に箸を置いて掌を握り、なにやらふるふると震えているように見える。

ヤバい、馴れ馴れしくしすぎて怒らせてしまったか。

「比企谷くん。あなたもパンさん仲間なのかしら？」

「愚問だぞ雪ノ下。俺の口からパンさん仲間という言葉が出た時点で、確かめなくてもわかるだろう？」

「それもそうね。ごめんなさい。高校で初めてパンさん仲間を見つけたから、気分が高揚してしまったみたいだわ」

「いや、気持ちはわかる。俺がさっき馴れ馴れしくすぎたのも、気分が高揚したからだし」

「ふふ。ではお互いさまということにしましょう。とりあえず、食事を済ませてからお話ししましょうか」



「ああ。そうしてくれると助かる」

雪ノ下は怒っていたのではなく、俺と同じようにテンションが上がっていたということだった。

理由も俺と同じく、パンさん仲間を見つけたからだということに、俺の雪ノ下への好感度が赤丸急上昇である。

パンさん仲間に悪い奴はいない。ちなみに『パンさん仲間』というのは、非公式ながらも多数のパンさん好きからの支持を誇るパンさんファンクラブ『孤独なパンさん』というブログで提唱された、パンさん好きの仲間を表す言葉である。

弁当を食べながら、今日は七十五点くらいかなと自己採点をする。ちよつとおかずのバランスが肉寄りになっているのが減点の理由である。明日は逆に野菜を増やして調節しよう。

「……明日は野菜のテリーヌで野菜分を増量するか。実際のメインはささみの大葉包みとかにして、卵焼きときんぴらごぼう、きゅうりの一夜漬けなんかを入れれば野菜増し弁当にできるな」

「その野菜のテリーヌには何を使うつもりかしらっ？」

「そうだなあ。ほうれん草と人参と玉ねぎ、ひき肉の代わりにライトツナフレークを使えばいい感じになると思うんだが」

「確かに肉じゃなくてツナ缶を使うのはいいアイデアだと思っわ。比企谷くん。あなたお料理もするのね。それもかなりの腕前とお見受けするけれど？」

「いやいや、まだまだ修行中だから」

「比企谷くんなら、由比ヶ浜さんにもつとうまく教えられたのではないかしらっ？」

「いや、無理。そもそも人にものを教えることなんて俺にはできる気がしない。それに、由比ヶ浜は俺の言うことをおとなしく聞いてくれないだろう。キモがられて終わりだ」

「そうかもしれないわね」

お互いに苦笑して話を切り上げ、食事を終わらせることを優先することにした。雪ノ下となら料理の話をするのも楽しいかもしれない。

弁当を食べ終わり、スポルトトップで喉を潤してから、弁当箱の下に

敷いていたナプキンを持ち上げて雪ノ下の方を見る。雪ノ下も同じようにナプキンを持ち上げてこちらを見ていた。

「あー、その、良かったら？見せてもらっても？」

「ええ。その代わり、比企谷くんのナプキンも見させてもらってもいいかしら？」

「じゃあ、とりあえず交換ってことで」

「ええ。ありがとう」

雪ノ下には俺のナプキンを渡し、雪ノ下から渡された七夕パンさんのナプキンをチェックする。

さすがは本家ディステイニー謹製。パンさんの魅力を引き出している。

「パンさんへの愛を感じるわ。素晴らしい作品ね」

「そう言われるとクラフター冥利に尽きるな」

「他にも何か作っていたりするのかしら？」

「ストラップとかぬいぐるみとか、抱き枕とかも作ったりはしてるけど」

「もしかして、猫乗りパンさんとか、両手を広げたパンさんの抱き枕とか？」

「まあ、そうだな」

「比企谷くん。あなた『パンさんと猫とハチさん』のハンドクラフターのハチさんなのかしら？」

「まあ、そうだな」

雪ノ下に素性がばれた。いやまあパンさん仲間だから別にいいんだけど。

「ちなみに、猫乗りパンさんが乗ってる猫は、俺んちの飼った猫がモデルだ」

「ハチさんの作品の実物が見れて、その上猫さんまでいるなんて、比企谷くんの家は桃源郷なのかしら？」

「雪ノ下も猫好きか？」

「ええ。大好きよ」

少し紅潮した頬でにこりと微笑まれる。何この子、凄い可愛いんで

すけど。

「なあ雪ノ下。俺ととも……………」

「よろしくお願いします。とりあえず連絡先を交換しましょう。猫好きのパンさん仲間なんてこれはもう運命の出会いと言っても過言ではないわ」

俺に全てを言わずにスマホを取り出して連絡先の交換を促してくる雪ノ下。まあ異論はなかったので、俺もスマホを取り出して連絡先を交換する。

「ふふ。比企谷くんがパンさん仲間だなんて、世の中は狭いわね。そうだね。お近づきの印にその七夕パンさんのナプキンを受け取ってもらえるかしら。使用済みのもので申し訳ないのだけれど」

「ありがたい申し出だが、いいのか？もう手に入らないものだろうか？」  
「同じものを何枚か持っているから気にしないで」

「じゃありがたいと頂戴する。代わりと言っちゃなんだが、そのナプキンを受け取ってくれ。使用済みのもので申し訳ないが」

「いいの？一点物だと思うのだけれど」

「刺繍の技術向上のために縫ったものだから、似たようなのがいくつもあるんだ。家族には猫の刺繍の方が受けがいいからなかなか使ってもらえなくてな。それに自分で使うよりもパンさん仲間に使ってもらう方が俺としても嬉しいし」

「そういうことなら、ありがたいと頂戴するわ。友情の証として大切に使用してもらおうね」

「お、俺も、友情の証として大切に使用してもらおうぞ」

「ふふ。ありがとう」

そう言って微笑む雪ノ下に見惚れた俺が無言になったことで、雪ノ下が心配して話しかけてきたそうだが、全く記憶に無い。

予鈴を聞いて我に返ると、涙目の雪ノ下が俺の顔を覗き込んでいて、反射的に思わず仰け反ってしまい、拗ねた雪ノ下を宥めるために結果として五時限目をサボったのは二人だけの秘密だ。

そしてこの昼休みを境に雪ノ下の俺に対する態度が変わりすぎて、由比ヶ浜や平塚先生、葉山や戸塚、材木座に色々と追及されることと

なり、なし崩し的に皆に俺の趣味がバレてしまったことが、これからの高校生活において吉と出るか凶と出るかは、経過をみてみないとわからない状況である。

まあでも、趣味嗜好の似通った友人ができたので良しとしよう。何が言いたいかと言うと、パンさん仲間は最高だということかな。

## 彼が彼女で、彼女が彼で（八雪）

放課後の奉仕部の部室で、俺は部長である雪ノ下雪乃から冷ややかな視線を注がれていた。

彼女の手には布製の小さなケースが握られている。いわゆるサニタリーポーチと呼ばれるものだ。

「比企谷くん。どうしてあなたのポケットから、こんなものが出てくるのかしら？」

「ポケットティッシュと間違えて持ってきてしまったのだと思うのだが」

「ポケットティッシュを男性が普段からこのようなケースに入れて持っているとは思えないのだけれど」

「少なくとも俺は、普段からそういったティッシュケースに入れて持っているのだが」

嘘ではない。俺はいつもサニタリーポーチを持ち歩いているのだが、それが雪ノ下の目の前で落として、さらにはその中に入っているものを雪ノ下に見られたのがまずかった。

雪ノ下の手の中にあるサニタリーポーチの中には一般的に入っているもの、つまりは生理用ナプキンが入っていた。

男である俺が持っているはずのないものである。

故に、俺はこうして雪ノ下に冷ややかな視線を向けられているのだった。

「母ちゃんか小町のサニタリーポーチをティッシュケースと間違えて持ってきちゃまったってのが、考えられる中では一番無難なんだが」

「確かに、そう考えるのが一番無難でしょうね」

「そうだろ？じゃあ、そういうことで」

「比企谷くん。あなた何故、サニタリーポーチなんて言葉を知っているのかしら？」

「母ちゃんと小町に聞いたからだけど？持っていくときはティッシュケースと似ているから間違えないようにって」

「つまり比企谷くんの家では、女性用のサニタリーポーチと、男性用の

ティッシュケースが近くに置かれていることがあるということかしら？」

「まあ、そうだな」

俺がそう答えると、雪ノ下はこめかみに手を当てながらため息とともに言葉を放つ。

「小町さんが言うには、比企谷くんがティッシュケースを持っていることはありえないということなのだけれど」

雪ノ下のその言葉に、俺は大きなため息を一つつくと、動揺を抑えるために深呼吸を数回繰り返す。

小町、俺がサニタリーポーチを持っていることを隠すためにそう言ってくれたのだろうけど、雪ノ下に対して意味がないことだったよ。現物を抑えられてしまっているからな。

「……………雪ノ下。由比ヶ浜は来るのか？」

「由比ヶ浜さんは今日は来れないそうよ」

「そうか。じゃあ悪いが部室に鍵を掛けさせてもらってもいいか？」

「何をするつもりかしら？」

「説明をするため、他人が入ってこれない状況にするのが望ましいからだ」

「そう。わかったわ。念のため、私の携帯はすぐに警察が呼べるようにしておくわね」

「好きにしてくれ」

立ち上がって扉に鍵を掛けに歩いて行き、無事に鍵をかけ終わってから自分の席へと戻る。

「窓の外からこの教室の中が見られるってことは無いよな？」

「ええ。その点については安心していいわ」

「雪ノ下。俺はおまえを信頼している」

「……………そう」

「今から見せることは、俺の家族と主治医しか知らないことだ。総武高校の教師陣も知らないことだ」

「……………比企谷くん、あなた、いったい何を隠しているの？」

雪ノ下が驚いているのを尻目に、俺はゆっくりと上着を脱いで、Y

シャツを脱いで、その下に来ていた黒色のTシャツを脱いだ。

「つつ!!」

雪ノ下はTシャツを脱いだ俺の上半身を見ると、慌てて視線を逸らして俺に背を向ける。

「……………なんで視線を逸らしたのかわからねえけど、まあこういうことだからさ、サニタリーポーチの中身も俺が使うために持っていたってわけなんだが。さらしも解いて見せた方がいいか?それとも、その、下見るか?」

思わず顔が熱くなる。下見るか?なんて、どんな痴女だよ。

「いえ、いいわ。比企谷くん、あなた、女性だったのね。何故男性として暮らしているの?ああ、答える前に着替えてちょうだい」

「んだよ。まあさすがに半裸のままじゃ落ち着かないから、着替えさせてもらおうわ」

「その、女性の着替えを見ることはあっても、男性の着替えを見ることはないから、恥ずかしいのよ」

「一応、俺も女なんだけど」

「対外的には男性でしょう?そうになると、どうしても、ね」

「……………着替え終わったぞ。で、何故俺が男として暮らしているかだったな。まあ簡単に説明すると、生まれた時は股間に男の証が付いていたんだよ。まあ医者に言わせると、それは陰核が肥大化したもので、男の証に見えていただけだということらしいんだが。それで幼少期はそのまま男の子として育てられて、俺も自分は男だと思って育ってきた。でも中学に入ってから暫くして、日曜日の朝に目覚めたら布団が血まみれで、ものすごく腹が痛かった。死ぬかと思つて母ちゃん所に行くのと、すぐに病院に連れていかれて、そこでそれが初潮だったことや、俺が女だつてことを知らされた。でもな、今まで男として暮らしていたし、戸籍も男だから、とりあえずは男のまままで暮らすことになったつてわけだ」

「そう。半陰陽というわけではなく、完全に女性なのね?」

「なんか限りなく女に近い半々陰陽みたいな身体だつてことは言つてたな。一次性徴の段階で完全に女にシフトしたらしい」

「じゃあ、比企谷さんって呼んだ方がいいかしら？」

「いや、女扱いは勘弁してくれ。こんな身体でも、思考は完全に男だから」

「よく見れば華奢だし、睫毛は長いし、髭も薄いし、かなり中性的なのよね。あなたって」

そんなにまじまじと見られると恥ずかしい。特に雪ノ下のような美人から見られるとなればなおさらである。

俺の思考は男なわけで、雪ノ下が女同士の感覚で俺に接することになるようなことになれば、間違いを起こしてしまえる自信がある。

「俺が女だからと言って、接し方を変えるようなことがあれば、俺は、おまえから距離をとらせてもらおうぞ」

「あなた次第、かしらね」

雪ノ下はそう言うのと、椅子から立ち上がり俺の側へと近づいてくる。そして俺の後ろに回り込み、背中側から抱き着いてきた。

「……………ねえ比企谷くん。あなたにとって、私はどういった存在かしら？」

「いきなり抱き着いてきて何を言ってるんだ？」

「私に抱き着かれるのは嫌かしら？」

「別に、嫌じゃないけど、その、ドキドキするから離れてくれると助かるんだが」

「女同士なのに、ドキドキするの？」

「思考は男だって言っただろ。おまえみたいな美少女に抱き付かれれば、男としてはドキドキしないなんてことはありえん」

「私も、今すぐくドキドキしているの。これは、私があるたのことを好きだからだと思う」

「雪ノ下。でも、俺は……………」

「私、雪ノ下雪乃は、比企谷八幡さんが好きです」

俺の耳元で囁くようにそう言うと、雪ノ下は俺の肩口に顎を載せてきた。

「男としてのあなたは、女としての私のことを好きなのではないかと、自惚れているのだけだ」



「……………雪ノ下」

「もしそうだとしたら、とても嬉しいのだけれど」

「確かに、俺はおまえのことが好きだ」

「……………本当？」

「ああ。比企谷八幡は雪ノ下雪乃のことが好きだ」

俺の告白を聞いた雪ノ下は、ただ無言で俺に抱き着いてきた。二人の間にある椅子の背もたれがものすごく邪魔に感じられた。

「雪ノ下、一度離してくれないか？それから、お互いに向かい合って、抱き合おう」

「それはすごく魅力的な申し出ね」

くすりと笑い、雪ノ下は俺の戒めを解いて立ち上がる。俺も椅子から立ち上がって、雪ノ下と向き合ってからその華奢な体を抱きしめた。

「比企谷くん。あなた、専業主夫が夢だったわね。それは今も変わらないかしら？」

「ああ」

「その、名前が変わっても大丈夫かしら？」

「……………まあ、専業主夫をさせてくれるなら構わないが」

「えっと、そういうことではなくて、その、なんて言えばいいのかしら。その、ね。私も比企谷くんの言い方を借りるとすれば、女の思考を持った男なのだけれど」

「……………つまりは俺の男版ってことか？こんなに柔らかくていい匂いがして綺麗なおまえが男だっていうのは信じられないんだけど」

お互いの身体を離して向かい合った状態になると、雪ノ下は顔を真っ赤にしながら腰のホックを外して、スカートを床に落とした。

更に雪ノ下は純白のレースの下着に両手をかけ、そのままそれを下へと引き降ろす。そこに現れたのは、毛の生えていない親指ほどの大ききの男性器で、それは小学校の頃に、プールの着替えの時に見たク拉斯メイトのものを彷彿とさせるものだった。

「……………私も、限りなく男に近い半々陰陽の身体だって言われたわ。比企谷くんとは少し違って、二次性徴で男にシフトしたということら

「しいの」

「その、服を着てもらってもいいか？」

「ええ。お見苦しいものを見せたわね」

「いや、その、おまえのだからかもしれないけど、ドキドキがヤバかったから」

「そ、そう……………」

身支度を整えた雪ノ下を由比ヶ浜の椅子に座らせ、俺は自分の椅子に座って膝を突き合わせるような形で向かい合った。

「雪ノ下。正直に答えて欲しいんだが、俺が男の思考を持った女だから好きになってくれたのか？」

「いいえ。正直に言う文化祭の頃にはもう、あなたのことが好きだったわ。この想いは胸に秘めておくつもりだったのだけれど、先ほど実際の性別でもあなたのお付き合いに問題が無いということを知ってしまったから、伝えずにはいられなかったの」

「あああつ！可愛いなこんちくしょう!!ぶっちゃけると、俺も見舞いに行ったときには既におまえのことが好きになっていたよ！由比ヶ浜とイチャつくおまえを見て、俺もおまえとイチャつきたいと思ってたよ！」

「嫉妬しつとがや谷くん、安心なさい。由比ヶ浜さんには友人として親しくしているだけよ」

「あれを押し付けられて感じないのかよ？」

「だって私、女としてノーマルですもの。友人の女性で興奮することはないわ。それよりも比企谷くん。そろそろはつきりさせておこうと思うのだけれど、覚悟はいいかしら？」

「怖えよ。何の覚悟だよ!?!」

椅子ごと後ろに下がり、雪ノ下から距離をとる。そんな俺を面白そうに見ながら、雪ノ下は口元を綻ばせた。

「私の恋人になる覚悟はできたかしら？比企谷八幡くん」

「おまえこそ、俺の恋人になる覚悟はできているのかよ？雪ノ下雪乃さん」

「あら。私はもう、結婚後の生活プランまで考えているのだけれど。

言ったでしよう？名前が変わっても大丈夫かって」

「具体的にはどういうことなんだ？名前を変えるっていうのは」

「そうね。まず雪ノ下姓を名乗ってもらうことになるわ。それから子供が出来たときは、対外的には雪乃を名乗ってもらうことになるわね。それはお互いの戸籍を考えればわかると思うのだけれど、男である八幡が身籠ったとなると色々と問題が起きるから、それらを防ぐためにも仕方のないことだわ。まあ、もしそうだったとしても、もろもろの調整は雪ノ下家で行うから大丈夫よ。孫のためなら父さんも母さんも全力で事に当たるはずだから」

「……………具体的すぎる」

これから先の人生をレールに乗せられたような気分させられたが、不思議と嫌悪感は無かった。

「その、さすがに子供とかは想像もつかないけれど、とりあえずよろしく頼む」

「それはどういう意味かしら？」

「いや、その、わかるだろう？」

「あなたの口からはつきりとした言葉で聞きたいのだけれど」

そんな風の上目遣いをお願いされると、はつきりと口にするしか選択肢が無くなるじゃないか。まあ仕方ないけど。

「雪ノ下雪乃さん。俺と結婚を前提に付き合ってください」

「はい。よろしく願います」

こうして、俺と雪ノ下の交際が始まった。

最初の内は学年一の美少女と学年一の嫌われ者の格差カップルと揶揄されて、風当たりもきつかったのだが、学年が変わる頃にはそのような悪評はすっかりと払拭されて、俺たちは奉仕部夫妻と呼ばれるようになっていた。

まあクリスマスにはお互いに大人になったし（俺が上になり、痛みに堪えながらも男のように腰を振りながら喪失した。精神的には俺が男なのだから仕方ないよね。いつかは雪ノ下に攻められてみたい――女としての悦びを感じてみたい――と思っているのは秘密だ）、校内でキスしてるところを目撃されたり、弁当を食べさせ合っているとこ

ろを目撃されたり、手を繋いで一緒に下校している姿を目撃されたりしていたのだから、そう呼ばれるようになるのも必然だったのだろう。

ちなみに由比ヶ浜と平塚先生には、他言無用ということであつた。俺たちの身体のことを説明してあり、二人とも今ではよき理解者となつてくれている。

由比ヶ浜は俺に好意を持っていたので、説明の際には放課後の奉仕部の部室で、さらしも解いた姿で上半身裸になり、混乱している由比ヶ浜の右手を俺の股間に持つて行つて女であることを確認してもらい、諦めてもらった。

その後、雪ノ下と付き合っていると云つたら、『なら女同士三人で付き合おうよ』などとほざいたので、雪ノ下が男であることを説明して、俺も雪ノ下も説明が面倒だったので、外見と性別が逆の者同士で付き合つていふという説明で誤魔化した。由比ヶ浜は納得したらしく、友人として俺たちを応援してくれることとなつた。

平塚先生には口頭で説明したが、雪ノ下の事情は知つていたらしく、俺の事情を知つて一瞬驚きはしたものの、最後には祝福してくれた。ついでに俺の腹を殴つたことについて謝罪されたので、一回だけ生理中に殴られたときは長引いてヤバかつたと言つたら、その場で土下座されたのには参つた。まあそれも今となつては良い思い出だ。

「うっす」

「こんにちは。比企谷くん」

奉仕部の部室で、いつものように交わされる挨拶。それがとても心地良くて、気が付くと俺は柄にもないことを口にしていた。

「なんかいいな。こういうの」

「比企谷くんがそんなことを言うなんて、珍しいこともあるものね」

「まあ、たまにはな。これからもよろしくな。雪乃」

「……………ええ。こちらこそよろしくね。八幡」

お互いに顔を見合わせてくすりと微笑む。

春の日差しが俺たちを祝福しているかのように暖かく降り注いで

いた。

もしも俺ガイルの世界にコロナウイルスが蔓延したらあるかもしれない会話（八雪）

『八幡、久しぶり。元気？』

「おお、元気元気。戸塚の声を聞いて更に元気になった」

『もう、すぐからかうんだから。ところで僕の大学はリモート授業だけど、八幡の大学も同じ？』

「ああ。もつと言うと入学式もリモートだった。しかも6月」

『あはは。僕のところも6月だったよ。キャンパスには行つたけど、教室でリモート入学式だった』

「あー、俺らのところも講堂でリモート入学式だった。帰りに教材とかりリモート授業の時間割とか受け取った感じ」

『同じだ。八幡のところも僕のところも公立だからかな』

「あー、そうかもしれないな」

『テニスもできないし、めつたに外出もできないから、体が鈍っちゃつて大変だよ。まあ室内トレーニングはできるけど、やっぱり物足りないかな』

「俺はもともとインドア派だからそうでもない」

『八幡って独り暮らしだったよね？ちゃんと暮らせてる？』

「あー、今は家にいるから大丈夫だぞ」

『え？自宅に戻ってるの？』

「自宅っちゃあ自宅だな。まあいろいろあったんだけど」

『気になるなあ。聞いてもいい？』

「あー、長くなるけどいいか？」

『うん。大丈夫』

「2回目の緊急事態宣言が出たのが5月だったか。そのときにお義母さんから電話があつて、緊急事態宣言で外出制限が出たから、娘を守ってやってってくれて言われてな、雪乃のマンションに居候することになったんだよ。それで俺が借りていたアパートは解約して、雪ノ下家に認められて婚約者として雪乃と同棲をすることになったんだが、

二人でなるべく外出をせずに同じ空間で過ごすわけだ。しかも親公認。まあ節度を持ったお付き合いをしていたわけなんだが、四六時中一緒に居るとき、その、スキンシップも多くなるし、雰囲気も良くなっちゃうわけで、まあ結構仲良く過ごしてたんだわ。それでも授業が始まって、俺も雪乃も同じ大学なわけだが、リモート授業はそれぞれ自分の部屋で受けていたんだが、雪乃にちよつかいをかけてくる奴がいて、そいつが俺と雪乃のIPが同じことに気付いて騒ぎやがったから、婚約者であることを暴露して、それから開き直ってリビングで並んでリモート授業を受けるようになった。つまり大学でも公認カプルの地位を確立したわけだ。それから順調に暮らしていたけど、8月に3回目の緊急事態宣言が出たときに、雪乃の体調が優れなかったときがあつて検査をしたらだな、まずいことが判明して話し合いの結果、実家に戻ることになったので、今は実家暮らしってわけだ」

『え？雪ノ下さん大丈夫なの？というか、いつの間に名前呼びになったの？』

「ああ。今は落ち着いている。まあ、同棲始めたあたりから名前呼びになったぞ」

『そうなんだ。それで、八幡の家に雪ノ下さんも居るの？』

「そうなるかな？今は5・5人で暮らしてるよ」

『5・5人って…、お父さん、お母さん、八幡、雪ノ下さん、小町ちゃん、あと猫ちゃんだっけ？』

「いや、お義父さん、お義母さん、義姉さん、雪乃、俺だな」

『それじゃあ5人だし、小町ちゃんって妹だったよね？』

「あー、俺の苗字、今、雪ノ下なんだわ」

『え？どういうこと？』

「わかりやすく言えば、雪乃と結婚したってことなんだが」

『そうなんだ。おめでどう八幡。でも結婚式に呼んでくれなかったのは寂しいな』

「あー、結婚式は挙げてない。籍を入れただけだ。こんなご時世だし、結婚式は落ち着いてからやろうと思ってる」

『そうなんだ。そろそろ落ち着いてきたから今年中には式を挙げるの』

かな?』

「いや、順調にいけば来年の俺の誕生日に式を挙げる予定」

『ずいぶん先なんだね』

「まあな。来年の6月出産予定だから」

『あ、ああ。そういうこと。だから5. 5人なんだ。今、雪ノ下さんの実家に住んでいるんだね』

「まあ、そういうこと」

『八幡、改めておめでとう。雪ノ下さんにもおめでとうって伝えてくれる?』

「いや、戸塚さえ良かったら、代わるから直に言ってもらってもいいかな?」

『うん。いいよ』

「悪いな。じゃ、ちよつと待ってくれ……。もしもし、代わりました。雪ノ下雪乃です」

『あつ、その、戸塚彩加です。ええと、このたびはご結婚、ご懐妊、おめでとうございます』

「ありがとう。戸塚くん」

『あの、落ち着いたらお祝いに行ってもいいかな?』

「ええ。八幡も喜ぶわ。それじゃあ、八幡と代わるわね……。もしもし、戸塚」

『あつ、雪ノ下さんも名前呼びなんだね。それと雪ノ下さんにも伝えただけど、落ち着いたらお祝いに行ってもいい?』

「ああ。まあこういう関係になっちゃうと、お互い自然と名前呼びになるぞ。それに雪乃が雪ノ下くんって呼ぶことはないだろう。お祝いの方はもうすぐ安定期に入るから大丈夫だと思うぞ」

『いや、世の中が落ち着いたらってこと』

「世知辛い世の中だよなあ」

『あはは。そうだね』

「まあでも、このままいけば年末くらいには会えそうな気がするけどな」

『そうだといいね』



「そうであることを願おう」  
『うん。じゃあまた、近いうちに連絡するよ』  
「わかった。ありがとう」